

の音便にて、土を濁り布を清しと聞えて、上なる肥國の亦、名も豊久士比泥別とあり、此山名、書紀に
 見るに同じ、此事、傳五の十四葉に云り、考合へし、多氣の多も古に清てぞ唱へけむ、此山名、書紀に
 見えたるは、上に引るが如し、又一書には日向襲之高千穗添山、峯ともあり、襲は姓氏録、序にも、天
 事は、上熊曾國の下、傳さて今皇孫命の、此山にしも降著坐りしことは、書紀に猿田彦神に、天鈿女
 五に委しくいへり、傳さて今皇孫命の、此山にしも降著坐りしことは、書紀に猿田彦神に、天鈿女
 復問曰、汝何處到耶、皇孫何處到耶、對曰、天神之子、則當到筑紫日向高千穗、楳觸之峯云々、果如先期
 皇孫則到筑紫日向高千穗、楳觸之峯とあれば、元より然るべき所由ありしことなるべし、當到は、
 マスベシと訓ても、到り給へと數ふるには非ず、到り、万葉二十五丁に、比左加多能安麻能刀比良伎
 坐むことな知れる故に告るなり、故下に果と云り、万葉二十五丁に、比左加多能安麻能刀比良伎
 多加知保乃、多氣爾阿毛理之云々、さて此山は、日向國風土記に、白杵郡内知鋪郷、天津彦々火瓊々
 杵尊、離天磐座、排天八重雲、稜威之道別々々、而天降於日向之高千穗二上之峯、時天暗冥、晝夜不別
 人物失道、物色難別、於茲有土蜘蛛、名曰大鉗小鉗、二人奏言皇孫尊、以尊御手拔稻千穗、爲粗投散四
 方、得開晴、于時如大鉗等所奏、搓千穗稻爲粗投散、即天開晴、日月照光、因曰高千穗二上峯、後人改號
 知鋪と見へたり、鉗字、万葉抄に引たるには、鉗とあり、いづれ名、意高千穗は、此風土記に云るが如
 くなるべきか、或説に、皇孫命齋庭の穗を御す、故に、其都に供養盛田ある故の名なり、今も久士布
 流は、靈異ぶるにて、書紀に楳日ともあると、同じ、楳は皆借、布流と備とは、同言の活用けるなり、多
 氣は万葉に高とも書る意にて、竹も高く立伸る物なる故の名なり、物の長さも、多氣と云は誤り、
 り、高き山を云り、さて此山の事、上にも云る如く、其とおぼしき二處に有て、いとまざらはし、其一
 は今も高千穗嶽と云て、かの風土記に見えたる、白杵郡なる是なり、和名抄にも、日向國白杵郡智
 保郷あり、續後紀十三に、日向國無位高智保皇神、奏授從五位下、皇神の下にあり、今は古本に依りて
 引、三代實錄一に、授日向國從五位上高智保神從四位上と見ゆ、保郷あるは、日向國の智保とつゞき
 たる地にて、一ツかは、かくて此山は、日向國の北の極にて、豊後國の堺に近し、肥後の日向土八代な
 たる地にて、一ツかは、かくて此山は、日向國の北の極にて、豊後國の堺に近し、肥後の日向土八代な
 北、方にあつたり、其あたりを今も高千穗、莊と云とぞ、これ智保郷なるべし、今世延岡なる主の領地、今